

松平齊貴の上洛道中記録に見る旅の姿

——「御上京一途」を参考として——

小山祥子

はじめに

弘化四年（一八四七）九月、松江藩主松平齊貴は、孝明天皇即位の奉賀使として、江戸赤坂の上屋敷から京都へ向けて出発した。將軍・徳川家慶の名代として行く、役目を負った旅であった。

雲州松平家としては初代直政を初めとして、宣維・宗衍・齊貴と四人の藩主が將軍名代として上洛をしている。そのうち、天皇即位に際しての奉賀使を経験したのは、直政と齊貴のみであり、齊貴の上洛に際しては、直政の実績を参考にしようと、記録を探していた節がみられる。

九月二日、赤坂上屋敷を出発した行列は、東海道を進み、十五日かけて京都へ到着した。一日の移動距離は約十里（約40km）、江戸を出発する際の行列人数は、実に一七六七人に上り⁽¹⁾、通常の参勤交代の倍以上の大行列になっていた。京都までのルートは、参勤交代で江戸から帰国する際にも通るものではないが、人数の多さ、行列の意味や役割から、当然様々な点で異なり、行く先々でより丁重な扱いを受けたものとみられる。

齊貴の上洛に関して詳細な資料としてあげられるのが、人間文化研究機構国文学研究資料館が所蔵する出雲国松江松平家文書のうち、「御上京一途」⁽²⁾

である。これは、このたびの上洛についてまとめられた文書群であり、その中に旅の行程についても事細かに記されている。そこで、江戸から京都までの道中の様子を、この記録から抽出し、將軍名代としての旅の姿を明らかにしたい。

出発の準備

九月二日の出発を前に、道中に起きる様々なことについて、入念な準備が進められた。

八月二十三日、道中に通過する、他領地の藩主や代官等へ向け、挨拶のため使者が送られた。このような場合、通過される側からは、「御馳走」とよばれる様々なもてなし・配慮を受けることがあった⁽³⁾。具体的には道や橋等の整備や掃除、城下への招待などが挙げられるが、松平家からは使者を通じて「御馳走振、且又御音問等之儀、御断」と、遠慮する旨を告げている。

八月二十四日、赤坂上屋敷の大般若の間において、道中の作法に関する条目が右筆から読み上げられ、行列に加わる者たちへ言い渡される。

八月二十六日には御扈從・番組筆頭の山口軍兵衛（悴の右内も連れる）、御広間方の服部熊市・原民右衛門・田口半左衛門、御広間方御雇の戸田良之進が宿割のため、江戸を出発した。各宿場のどこに誰がどのくらい宿泊・休憩

ては名代として家老・乙部九郎兵衛が改めることとした。

五つ時（午前七時）、品川にて昼休。銀三枚を支払う。本陣の亭主は鶴岡市郎右衛門。その後、川崎宿で小休を取った。藩主の休憩料として金百疋（金一分）、そのほか御駕籠立、御幕料としてそれぞれ金百疋ずつ下された。また、亭主から格合の通りとして扇子が献上され、それに対しては金百疋が下された。

七つ時（午後四時頃）、神奈川宿に到着し、宿を取った。本陣の亭主・鈴木源左衛門へ銀五枚が支払われた。

この後毎日、行く先々の宿場で小休・昼休・宿泊を取るわけだが、その際、本陣に支払われる藩主の休憩料や宿泊料の金額は定められており、いずれの宿においても昼休は銀三枚、宿泊は銀五枚であった。そのほか、本陣からの献上品やもてなしなどに応じて金百疋や二百疋が下されている。

ちなみに、通常の旅であれば、この神奈川宿へ江戸の御用聞き町人らが御見送りとして罷り出て、「棒持」をすれば、藩主の通り掛けに御目見えをすることができた。しかし、今回は特別な旅であったためか、そのようなことは嚴重に差し止められており、罷り出る者は一人もいなかったと記される。

九月三日 暁八つ半時過ぎ（午前二時半）神奈川宿 出発

程ヶ谷、戸塚にて小休、五つ半時過ぎ（午前八時過ぎ）、藤沢にて昼休を取った。本陣亭主の蒔田源右衛門からは献上品として砂糖漬けが差し出された。

その後、平塚、大磯で小休を取り、夜五つ時（夜八時過ぎ）に小田原宿に到着した。小田原藩主の大久保加賀守から「御旅行御見舞」として使者をもつて「紫蘇包梅」と鮑を贈られ、即刻使者をもてなし、お礼を渡した。さらに、大久保加賀守の「御馳走」として数々の役人が派遣されており、小田原

藩の町奉行が江戸口番所木戸外へ罷り出る、目付・同心が町中の先払いを務める、などといったことが行われている。事前に「御馳走」は断つたものの、道中に差し障りがないように、この後も各領地において通過する地の藩主や代官等からこのようなはからいがされている。

本陣亭主の清水彦十郎からは格合の通りとして伊勢海老が献上され、加えて上洛のお祝いとして鯛が献上された。斉貴は伊勢海老に対して金百疋、上洛御祝に対しては金二百疋を渡している。大名家が各本陣へ休憩・宿泊する際、通例として本陣亭主からの献上品があった。これに対する返礼の下賜金は金額が決まっていたようだが、今回は名代のための上洛ということで、さらに別に献上品があった。この場合も下賜される金額は決まっていたらしく、他の宿場で上洛についての献上品を受け取った際も、本陣亭主へ金二百疋を渡している。なお、亭主家族からも受け取ることがあり、その際は金百疋を渡すことと決めていたようだ。

九月四日 暁七つ時（午前三時）小田原宿 出発

小田原宿を出発後、箱根権現社へ御扈従の大西半蔵が代参を務めている。四つ時過ぎ（午前九時過ぎ）には箱根宿へ到着し、昼休を取る。

箱根の関所においては、供の面々が通行する際、長棒（乗物）の者は残らず乗ったまま通ったが、医師は関所側から差し障りを申し立てられたため、乗物から降りて通った。松江藩士が参勤交代などの参考として持っていたと考えら



箱根関所の様子
「道中図記」(5)より

れる道中記「安永大成道中記提要」⁽⁶⁾によれば、箱根関所を通過の際、「御三家諸士ならびに雲州諸士は乗物にて直通り」と記される。今回の行列で乗物に乗っている者には医師もいたが、彼らだけはこの規定に合わなかったものと思われる。

箱根宿本陣亭主の石内太郎左衛門からは格合として赤飯、上洛祝いとして鯉が差し出された。

三島宿にて小休（御駕籠立、御幕料各百疋）の際、三嶋大社へ代参があった。また、葦山代官の江川太郎左衛門が旅行見舞いとして鯉節を贈っている。

夜五つ時（午後八時過ぎ）、沼津宿に到着し、宿を取った。沼津藩主・水野惣兵衛から旅行見舞いが贈られる。本陣亭主の清水助右衛門からは格合として鱸が、上洛祝いに鯛が贈られ、そのほか亭主の父や息子たちからも献上品があった。

九月五日 暁七つ時（午前三時） 沼津宿 出発

原宿にて小休の後、五つ半時（午前八時過ぎ）吉原宿にて昼休を取り、本陣亭主の長谷川三郎兵衛から格合として蛤、上洛祝いとして鯉が贈られた。

その後、蒲原、油井、沖津で小休の後、夜五つ時前（午後九時前）に江尻宿に到着、宿をとった。駿府城代の本多対馬守から鯛を贈られ、明日六日、駿府を通る際、大手先町まで罷り出て、江戸表のご機嫌伺いをしたので、立ち寄ってほしいと申し出られた。前例では吸い物などを差上げるところだが、このたびは兼ねてから「御馳走」を断られているため、それは出さないこと、江尻宿の出發が何時か教えてほしいこと、大手先町屋へ入る際、下座敷まで対馬守がお出迎えをするべきところだが、その際、もし雨が降ったら出迎えができないので、「承知おき頂きたい」といったことを申し出ている。

これに対し、斉貴からは、大手先町に立ち寄ることとし、暁八つ時（午前一時過ぎ）に供揃をするを告げている。

本陣亭主の寺尾与右衛門から格合として栗を、上洛祝いとして鯛が贈られた。

九月六日 暁七つ半時前（午前四時前） 江尻宿 出発

駿府において本陣到着の後、大手先客屋の難波屋伊右衛門方へ行き、本多対馬守ら役人衆に対面した。その後本陣へ戻り、支度の後、出立した。

丸子宿で小休の後、八つ半時過ぎ（午後三時過ぎ）岡部宿にて昼休を取る。駿河田中藩主の本多豊前守から旅行見舞いとして煎茶、鯉節が贈られた。興味深いのが、宿場近くの鬼島村の小柳津源六という者から鞭竹が贈られていることである。この人物の先祖が関ヶ原の戦いの際、徳川家康に御旗竿にするための鞭竹を献上したことから、行列の際にも鞭竹を献上するのが常ということである。前述の「安永大成道中記提要」⁽⁶⁾には鬼嶋村の項に、「勝手ノ藪ト云アリ 神君美濃御陣ノ時、御旗竿切玉ヒシ處トテ道端ニアリ」と記される。本陣亭主の内野九兵衛からは格合として松茸が、上洛祝いに干鮎が贈られた。

藤枝宿で小休の後、四つ時（午後十時）島田宿に到着した。浜松藩主・井上英之助、掛川藩主・太田摂津守から旅行見舞いとして使者があった。また、本陣亭主からは格合として小肴、上洛祝いとして同人及び忰から献上品があった。

明日七日は大井川・天龍川渡しもあり、道程も多くなる。そうしたところ、大井川の水は少なく、夜越えとなるであろうから、長持類をはじめ、藩主よりも先に遣わされる道具そのほか御供以外の面々の御供揃は、藩主が出發す

るよりも一時半（約三時間）前に罷り立つようにと触れが下された。

九月七日 六つ時前（午前五時前） 島田宿 出発

大井川は徒渡しである。惣川越は八百人となり、金十両が支払われた。日坂宿で小休を取り、掛川宿へ到着した。この際、太田撰津守より御馳走が差し出されている。八つ半時（午後三時頃）、袋井で昼休を取る。ここでも太田撰津守より薯蕷（まのいも）が旅行見舞いとして渡されている。本陣亭主の田代八郎右衛門からは格合として寒晒餅、上洛祝いとして鯉が差し出された。

次の宿である見附から、近道として間道を通行するのはどうかという議論があった。江戸出発前には決め難かったため、袋井宿にて問い合わせをしたところ、「御使（使者）」としては前例がないとのことであった。そのため、藩主の行列に立つ面々は池田街道を通り、その外の面々は間道を通ることは苦しからずということになった。

見附宿で小休を取り、浜松宿へ入る前に天龍川を渡った。天龍川は船渡しである。九十艘を出し、金六両壹歩二朱が支払われた。浜松宿に到着したのは日も変わった九つ半時（午前〇時半頃）であった。浜松藩主の井上栄之助から旅行見舞いとして椎茸・鰯が贈られ、家老と年寄、町奉行がご機嫌伺いとして本陣へ参上した。本陣亭主からは格合として干肴、上洛祝いも差し出された。

明日、舞坂から新居へは渡し船がある。一斉に押し掛けては混雑し、渡船の差支えとなるため、道具類、同勢のうち、藩主よりも先に行く非番の者、あるいは先に遣わされても差支えない長持類、駄荷等は、今晚の内に罷り立ち、舞坂へ向かうように宿内へ申し触れがあった。

江戸から去る三日、国元（松江）から先月二十五日に送られた飛脚によつ

て御用状が到来した。当宿（浜松宿）を明朝卯刻に出立することを知らせるため、東西へ飛脚を立てた。「殿様はご機嫌よろしく、七日大井川を渡り、同夜浜松駅に御泊り。御膳も召し上がり、御喜悅に思し召される。」といった内容を送った。

明日八日に通行することとなる、今切（新居）関所へあて、乙部九郎兵衛と三谷忠太郎の名をもって、この浜松宿から鉄砲証文が送られた。その文面には、鉄砲の本数と玉目、通行の理由が記され、者頭の有馬藤助・組外御者頭代の齊藤茂左衛門二名の手によって届けられた。結果、委細承知とのこと、鉄砲の通過は許可された。

九月八日 暁七つ半時（午前四時前） 浜松宿 出発

浜松宿到着からわずか四時間後、早々の出発となった。舞坂宿で小休の後、新居川を渡船した。齊貴は三河国吉田藩主・松平伊豆守のはからいにより伊豆守の「御船」に乗り、当番の御側役、御納戸、御小姓、御医師、御長刀、草履取が同船した。齊貴の船には水主頭一名、水主十二名が付き、頭へは金百疋、そのほかの者へは合計金三百疋が下された。天気もよく、無事に新居へ渡船した。川渡しができない場合は、脇街道を通って本坂峠を越えるはずであったが、その必要はなかった。御進献長持とその守護の面々も伊豆守の船で渡った。この長持二棹が通行する際、ひと悶着起きている。関所前に着船したところ、関所詰の百人者が罷り出て、長持を関所の方へ寄せて通行させ、改めの者が罷り出てうかがうと言ってきた。御進献物先乗（あとのり）の赤木数馬は、いかかするべきか悩み、総括役の御進献物跡乗（あとのり）の望月兔毛に尋ねた。すると、普通の長持類であれば改めるところであるが、殊の外重要な品であるため、関所の番人などが改めるものではないと言った。そのように答えたところ、

関所側は、宝暦の度、つまり宝暦五年（一七五五）に齊貴の曾祖父・宗衍が將軍名代として上洛をした際の先例に倣っていると云ってきた。しかし、宝暦の際の旧記にはそのようなことは見えず、こうなつては関所番人の申し分が不審でないとは言えない。もし旧記に書き漏らしたとしても、元来関所などには差構える筋はなく、このようなことは我々の先例にも見えないとして、関所へ寄せて通行することはせず、通常の往來の通りに通行を済ませた。

四つ時（午前九時過ぎ）、新居宿へ到着し、昼休みを取る。松平伊豆守より旅行見舞いがあり、本陣亭主の疋田八郎兵衛からは格合として鯉ぼら、上洛祝いも差し出された。

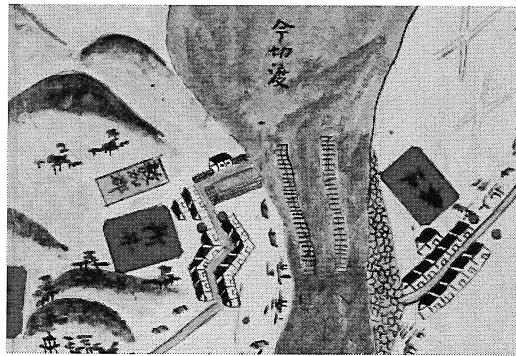
また、新居関所の定番・五味左織も本陣へやつて来て、献上品を差し出した。新居関所の通行については、浜松宿から五味左織へ対し、使者を出してその作法を申し出ており、その取扱については附紙に記された。この内容は左記のとおりである。取扱については条文の後に沿える形で記されている。

- 一、御駕籠之戸少し引御通行之事
- 一、御道具類御建之事

- 二ヶ条本文之通ニ而宜鋪候
- 一、御長持類無断相通候事

当御関所ハ武器敵重之御改所故、御三家様にてても長持類長き箱類ハ都而御改有之候旨、尤上り之所ハ少々最安ク相濟候様取斗候

- 一、御召替御駕籠、包之俣御番所前江差寄せ、御召替之旨、申断相通候



新居関所の様子 「道中図記」(5)より

事

御召替御駕籠茂、御長持類同様に御座候御供之面々

- 一、公儀 御目見之御家老右家筋之御家老ハ勿論、其以下長持駕籠之分

ハ乗通身分之者と申断戸少し引乗通候事但鍵建通候事

乗輿之儀ハ如何躰懸合候而茂相整不申候

其余ハ本文之通

- 一、丸棒駕籠之分ハ下乗戸少し引之相通事

但鍵建通事

本文之通ニ而宜鋪御座候

- 一、剃髮惣髪之面々不及断相通候事

御供立之内二候へハ諸百人者より之届切ニ而宜敷、供立放れ候

面々ハ御番所前江罷出改を受候事

- 一、丸棒駕籠以下病氣乗通之節、姓名病牀前以申届置、西番所前江駕籠

差寄せ下番人罷出名前病牀相尋候節自身名乗病牀申届改を受通候事

本文之通ニ而宜敷候

- 一、帯刀以上之者足駄手傘相用候事

本文之通ニ而宜敷候

- 一、長持跡附駄荷等無断相通候事

長持ハ前文之通跡附者上リハ無断駄荷ハ本文之通ニ而宣布候

- 一、御徒以下之者共 御通行御當日并前後一日充ハ不及通手形罷通事

新居ハ通手形之伺ニ及不申上候

- 一、御鉄砲之儀者左之通作法相替候

一、御使之方御鉄砲ハ墨星之通歩行印之所江罷出駄人江懸合仕候

事ニ御座候

一、御三家様方御通行之節ハ朱星之通歩行印之所へ着座、番頭江懸合仕候事ニ御座候

一、御持筒之分ハ證文ニ何十挺与有之ヶ条ニ内何挺手筒与相認候事、左候へハ御手筒ハ持行人之手之上ニ戴置候へ者向々人々手ニ取り不申改相濟候、其外之分ハ手ニ取改候由ニ御座候

右之通作法ニ御座候處、此度より御三家様御同様之取扱ニ相成別左之凶江書込置

(関所の凶に役人の配置や改めの方法などが書き込まれる。)

新居宿を出発し、白須賀宿・二川宿で小休を取る。この二川宿の休憩については、豊橋市二川宿本陣資料館に「二川宿本陣宿帳」(2)という貴重な記録が残っている。二川宿は、雲州松平家が通常の参勤交代時に宿泊に利用する宿場であった。しかし、今回は名代の大行列ということで、宿場側から受け入れきれないと宿泊を断る願いが出され、結果的に小休という形になった。宿帳によれば、四つ半時(午前十時半)から通行があり、先番は九つ時(午前十一時半)に到着、玄関へ幕を張り、御門へ目印を出した。八つ三分時(午後二時過ぎ)に藩主が到着し、ゆるゆると小休止、滞りなく御立ち払いとなった。その行列の様子は見事であり、近在から三百人もの見物人が現れたと記される。

七つ半時(午後五時)には吉田宿へ到着し、宿泊となった。松平伊豆守から旅行見舞いとして薯蕷、交御肴が贈られた。本陣亭主の中西與右衛門からは格合のほか、上洛祝いも差し出される。

九月九日 六つ時(午前五時前) 吉田宿 出発

御油宿を経由の後、五つ時過ぎ(午前七時)に赤坂宿で昼休を取る。松平伊豆守から旅行見舞い、本陣亭主の赤坂彦十郎からは格合として薯蕷、上洛祝いとして亭主や忰からも差上物があつた。この休憩中、法蔵寺から使者が来て、「諸大名が」上洛の際、参詣される方もおられるが、如何されるかと伺いがあつた。このたびは参詣しない旨を伝えた。

赤坂を出発し、藤川で小休の後、岡崎宿で宿泊した。岡崎藩主の本多中務大輔から旅行見舞いを受け、この他、数々の「御馳走」として役人が派遣された。本陣亭主の中根甚太郎からは格合として鯿を、上洛祝いとして扇子や肴を差上げられた。重陽の節句の祝儀として、奥列、御目付は御次へ罷り出て御目見えした。

大坂御目付帰りの斉藤左源太、加藤修理に、明日十日、行列が「御出逢」となる様子であると伝わった。道中で他の大名家や幕府の役人、使者等と出会う際は、失礼がないようにと非常に気を遣っている。この際は、藩主の行列の面々は、くれぐれも無礼がないようにし、末々まで笠脱には及ばないとし、御先、御跡の面々は、片寄(道の片側に寄り)、無礼がないようにし、末々の笠をかぶるものは脱いで罷り通ることとした。

九月十日 暁七つ半時(午前四時) 岡崎宿 出発

四つ時前(午前九時頃)池鯉鮒宿ちりゅうに到着し、昼休を取る。三河国刈谷藩主の土井民次郎から旅行見舞いを贈られ、本陣亭主・永田清兵衛からは格合として交肴、上洛祝いとして扇子が贈られた。その後、鳴海宿を通り、七つ時過ぎ(午後四時過ぎ)に宮宿へ到着、宿泊した。

尾張藩主から安否見舞いとして使者が送られてきた。現在は極めて儉約中

につき、音物は御断りをしていることもあり、参上した使者に対し、本来は藩主齊貴が直々に応対すべきところだが、齒痛のため、番頭をもって断りを入れた。

本陣亭主の森八郎右衛門より格合として延命酒を、上洛祝いとして肴が差し出された。

この日、伊勢神宮への勅使・藤波氏^③が来る十三日、関宿と土山宿の間で行き違いとなる様子とわかり、次のように定められた。

一、御出逢被遊候節、御供之面々下乗下馬、末々笠脱、無礼無之様致し、可罷通事

但、先方之者より強制いたし候而も右之通ニ致し、不差控御供仕可

罷越事

一、御進献物行違候節も、不差障様罷通、勿論下乗下馬末々笠脱無礼無之様いたし可申旨、御進献附之面々可相心得事

一、御先、御跡江罷越候面々ハ可成丈除合出逢不申様いたし可申、若除合出来不申場所ハ下乗下馬いたし片寄末々笠脱相居、通輿相濟候ハ、可罷通事

右之通末々之もの江も急度可申付置旨、且支配下有之面々ハ、支配下江も不洩様可及通達由、御番頭・御用人・御留守居・御目付・御側役江申段之

この条文によれば、行き違いのパターンとしては三種類が想定されていることがわかる。まず、藩主の側で供となる面々については、馬や乗物からは降り、末々の者まで笠を脱ぎ、無礼がないようにすれば通行するものとしている。次に、御進献物についても同様に、差し障りのないように通行するも

のとする。その一方で、藩主の行列の先や跡に行く面々については、できるだけ行き違いをしないようにし、いざ行違ってしまったときは、道の片側に寄り、勅使の輿が通り過ぎるまで待つてから通行するように、としている。

宮から桑名までの経路では、海を渡るルートと、佐夜までは陸路を行き、木曾川を通る別ルートの二手に分かれることとなった。藩主と御進献長持は佐夜廻りとなった。

九月十一日 暁八つ半時過ぎ（午前二時半過ぎ） 宮宿 出発

五つ半時（午前八時）、佐夜へ到着、本陣亭主の岩間権左衛門からは格合として小肴、上洛祝いも差し出された。

尾張藩主より、佐夜から桑名までの船について問い合わせがあった。以前は尾張側が船を手配していたが、最近では桑名側が手配をしている。もし必要ならば言ってくれとのことであった。松江藩側は、江戸で既に桑名側（松平越中守）に約束して頂いているので、問題ないと答えている。御進献長持も藩主齊貴も松平越中守の用意した船に乗り込んだ。藩主の供は家老、近習頭二人、番頭一人、御用人一人、御納戸二人、御扈從四人、御側役二人、御廣間方御右筆一人、御医師二人、御外科一人、御茶道頭一人であった。

夕八つ半時（午後三時）に桑名宿へ到着、松平越中守から旅行見舞いとして使者が遣わされ、「御馳走」として役人も派遣された。本陣亭主の大家と六郎からは格合として養老酒、上洛祝いとして肴や蛤が贈られた。また、通常ならば藩主とともに本陣へ置かれる御進献長持を、脇本陣へ差し置いたことについて、金二百疋が下されている。

九月十二日 暁八つ時過ぎ(午前一時半過ぎ) 桑名宿 出発

朝六つ時(午前五時前) 四日市宿に到着し、昼休みを取る。代官の多羅尾久右衛門から旅行見舞として使者が送られた。また、明日通行予定の亀山藩主からも使者が遣わされた。本陣亭主の清水太兵衛から格合として自然薯が、上洛祝いとして肴が差上げられた。その後、石薬師、庄納を経由し、八つ時過ぎ(午後二時過ぎ)に亀山宿へ到着、宿泊となった。その後、紀州藩主から使者が送られてきた。領分通行につき、齊貴本人が応対するべきところ、先日と同じくこの日も歯痛のため、断りをしている。本陣亭主の樋口六郎兵衛からは格合として鱸と扇子が、上洛祝いとして亭主や忰のほか、妻・娘からも差上物があつた。

九月十三日 暁七つ半時過ぎ(午前四時過ぎ) 亀山宿 出発

朝六つ時(午前五時前)に関宿にて昼休み、本陣亭主の伊東平兵衛から格合として火縄、上洛祝いには亭主の他、忰や隠居、家内の者から差上物があつた。

伊勢への奉幣使・藤波三位の通行について、この日猪の鼻峠の御立場前において行き違いとなった。兼ねて言い渡していた通りの対応を取った。

坂ノ下で小休の後、夕八つ時(午後二時)には土山宿へ到着、宿泊となった。市橋下総守、水口藩主・加藤越中守から使者が遣わされ、応対をした。本陣亭主の土山平重郎から格合として玉子、上洛祝いとしてしめじ茸などが献上された。

土山宿では、次のような達しがあつた。「この度、江戸を出発する際に仰せ聞かせた趣は、いずれも承知のことにあるはずだが、道中では末々の者が心得違いをして不作法のことがあつたと聞く。このようなことはもつてのほかで、

このうえ、不埒のことがあれば、当人はもちろんのこと、主人までも越度(落度)とするので、間違いなく末々のものへよくよく申し聞かせること。なお、日雇のものは、出雲屋弥太夫(日雇頭)へも申し談じおくが、主人くからも申し聞かせること。」作法については、江戸を出発前に言い渡したことであるが、出発して十一日目、不作法者も出てきていたようである。

九月十四日 暁七つ半時(午前四時) 土山宿 出発

六つ半時過ぎ(午前六時) 水口宿にて昼休みを取る。藩主・加藤越中守より寒晒、百合根の旅行見舞があつた。本陣亭主の鵜飼傳左衛門からは格合として弦巻が、上洛祝いとして草津本陣亭主とともに扇子が差し出された。

夕八つ時(午後二時)、石部宿に到着、膳所藩主・本多隠岐守より旅行見舞いとして松茸、葛粉が、水口藩主の加藤越中守より松茸、鮒が贈られた。本陣亭主の小嶋金左衛門からは格合として玉子、上洛祝いとして鯉、亭主の家内からはしめじ茸や扇子が差し出された。

九月十五日 朝六つ時(午前五時) 石部宿 出発

五つ時(午前七時)、草津宿にて昼休み、本多隠岐守より旅行御見舞があつた。本陣亭主の田中七左衛門から格合として竹鞭、上洛祝いとして鯉や酒が差し出された。

膳所宿を通行の際、南門前町へ本多隠岐守が出向いてきたため、齊貴は乗物を降り、挨拶をした。

八つ半時過ぎ(午後三時)、大津宿へ到着し、宿泊となった。本陣亭主の大塚嘉右衛門、またその家族から上洛祝いが差し出された。

この大津には、十五日、十六日の二日間滞在し、翌十七日に出立となった。

九月十七日 暁七時半時(午前四時) 大津宿 出発

藩主の志立傳八・澤新五右衛門の二名は早朝に大津を出発し、京都の松江藩邸で待ち受けることとした。

京都へ入る行列は、江戸出立と同様とし、九つ時(午前十一時半)、藩邸へ到着した。御進献御長持は到着後、玄関より土蔵へと運ばれ、昼夜問わず御徒番が守ることとした。

おわりに

ここまで、十五日間の行程を見てきたが、いくつかの情報を得ることができた。まず、各宿場からの出発の時間であるが、午前三時〜五時頃の出発が多く、まだ暗いうちに宿を出ていたことがわかる。稀に午前一時半頃出発の日も見られ、それに伴って、通常は午前九時〜十時頃に取り合はざる昼休みを、午前五時に取り合など、かなり早い時間に取り合っていることもある。その一方で宿入りは午後二時〜三時、あるいは午後八時頃であるが、中には午後十時や夜中の一時頃という時もある。宿の滞在時間が最も短かったのは浜松宿で、午前〇時半に到着し、午前四時には出発している。これらは藩主の出発・昼休・到着の時間であるから、先に行く者はその一〜二時間以上前に出発・到着していたことと思われる。かなり無理のあるスケジュールではあるが、あらかじめ定められた宿に滞りなく入るため、やむを得ない選択であったと考えられる。

また、他領内へ入る際の大名家とは互いに気遣いが必要であった。松平家からは事前に使者を派遣し、「御馳走」への断りを入れてはいるものの、相手

方からは先払い等の役人の派遣、贈答などが行われている。中には斉貴と直接面会した藩主や城代もいる。

將軍から天皇への「御進献物」の扱いは特徴的である。管理方法や関所の通過、川渡し、他の使者との行き違いなどに際し、事細かく定められており、名代としての行列ならではの様子がうかがえる。また、本陣亭主、家族、その他町人や村人との贈答のやりとりも非常に多いが、上洛ということで、特別に献上品が差し出されている。

今回の資料には道中における「他者とのやりとり」が中心に記されており、藩主の食事や宿における様子などといったことはあまり記されていない。今後は各宿場に残留の宿帳などと照らし合わせることで、より詳しい旅の様子を解明していくことが重要であると考えられる。

注

- (1) 「松平斉貴上京行列図」(東京国立博物館蔵)全五巻には、赤坂上屋敷出発時の行列の様子が描かれ、その人数は一七六七人である。
- (2) 出雲国松江松平家文書「御上京一途」
- (3) 山本博文『参勤交代』講談社現代新書 一九九八年
- (4) 前掲注(1)
- (5) 「道中図記」文化十年四月書写(松江市蔵・松江藩士・岩佐家旧蔵)
- (6) 「安永大成道中記提要」天保元年初冬写 小川光貞(島根県立図書館蔵)
- (7) 「二川宿本陣宿帳 御休泊記録 まる番」(豊橋市二川宿本陣資料館蔵)
- (8) 伊勢神宮祭主・藤波教忠(一八二四〜一八九二)が九月神嘗祭に勅使として

参向した際と思われる。

松江歴史館

研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平齊貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ——「御上京一途」を参考として——	小山 祥子	27
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫟山・市郎父子に関する新知見 ——展覧会開催後の調査より——	西島 太郎	73
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について ——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——	西尾 克己 稲田 信 木下 誠	160(1)

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成 24 年企画展	大塚 享義	122(39)
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成 25 年 3 月



松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

- Current Status and Issues of research MATSUE castle town----- NISHIJIMA Taro --- 1
- The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip
of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----KOYAMA Sachiko--- 27
- Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar
of MATSUE clan vol.1 ----- NISHIJIMA Taro--- 37
- A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---- FUKUI Masayuki--- 50
- New knowledge about the father and son
REKIZAN and ICHIRO HORI-----NISHIJIMA Taro--- 73
- Document introduction : A list and reprint of the document
of ADACHI (安達家) vol.1 -----SINSYO Masanori--- 101
- Investigative report of MITANI house-----ADACHI Masanori--- 130 (31)
- Religious background of early modern times -----NISHIO Katsumi--- 160 (1)
- daimyo graves and the Horios
INATA Makoto
KINOSITA Makoto

◆MUSEUM STUDIES◆

- Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum
-----OTSUKA Takayoshi--- 122 (39)
- Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson.
Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition
----- NISHIJIMA Taro--- 109

Published by
Matsue History Museum
Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇―〇八八七

電話 ○八五二―五五―一六〇七

FAX ○八五二―三二―一六一一

